

「主の祈り」(マタイ六・五〜一五)

1 信仰生活の手引き

この八月、第二週の日曜日から、十戒、使徒信条と取り上げてきましたが、今日は主の祈りです。教会が大切にしてきた三つの主要な文を、これで一通り学ぶことになります。

これら三つの文、聖書との関係でいうと、十戒は旧約聖書・出エジプト記にそのまま出ています。使徒信条は聖書にそのままの形では出ていませんが、聖書の示す信仰を簡潔に表したものです。主の祈りの原形は聖書にあります。その箇所の一つが今日のマタイ六章です。ルカ一章にもあります。聖書に伝えられているものが教会で使うため整えられたのが主の祈りです。

そう考えると、一番の権威はやはり聖書だということになります。聖書の、少し難しい言葉でいうと規範性、つまり聖書こそ私どもが依拠すべき、のつとるべき基準であるということ、それは明らかです。

他方しかし、聖書を生かし用いようとした信仰の先達の努力も、そこにはつきり見えてくるといってよいのではないでしょうか。

三つの文(十戒、使徒信条、主の祈り)、これらのうち、どれが大事で、どれがそうでないということではできません。三つがうまく、それぞれの役割を果たしながら、全体として、教会の形成に、信仰の生活が私どもにおいてつくり上げられることに貢献している、三つとも欠かせない、というのが真実です。とくに今日取り上げる主の祈りは、私どもに一番身近なものであり、また大切なものであることはいうまでもありません。

天にまします我らの父よ、

ねがわくはみ名をあげさせたまえ。

み国を来たらせたまえ。

みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。

我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。

我らに罪をおかす者を、我らがゆるすごとく、我らの罪をもゆるしたまえ。

我らをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ。

国とちからと栄えとは、限りなくなんじのものなればなり。アーメン

この主の祈り、ふだん私どもはこれをどう使っているでしょうか、少し振り返ってみるのは有益です。

まず礼拝では、献金をささげたあと、主の祈りを唱えています。先週、使徒信条のとき申し上げたように、使徒信条、献金、そして主の祈り、これらは神の言葉、神の語りかけに対する私どもの応答です。応答は、信仰を言い表すこと、感謝をささげ献身の思いを表すことなどです。そうした応答を、いわば締めくくるものとして主の祈りがささげられています。

主の祈りは、そのほかに、週日の私どもの集まりの一つ、聖書を読む会でも、最

後に主の祈りをともに祈っています。これも、一つの締めくくりであるかも知れませんが。しかし教会によつては、礼拝の最初のほうで唱えているところもあります。いつもまとめのように使われているわけではありません。キリスト教の学校で、毎日のチャペル礼拝で唱えているところも、私の知っているかぎりいくつかあります。また授業のどこかで、きつと若い学年で、勉強するように、カリキュラムに組み入れられていると思います。

『ハイデルベルク信仰問答』というのがあります。信仰教育の手引きとしていまも世界の教会で広く使われています（もともと宗教改革の時代につくられた古い信仰問答書、一五六三年）。

『ハイデルベルク信仰問答』で主の祈りが、信仰者の生活の手引きとしてとらえられていることを思い起こしたいと思います。この信仰問答書は、はじめに人間の惨めさ・罪を明らかにし、次に信仰について語り、最後に、信仰の生活について教えています。そしてこの信仰の生活を「感謝」という言葉で総括して、十戒と主の祈りをここで説いているのです。つまり主の祈りは祈願、祈りであるとともに、信仰者が感謝の生活を営むための、別な言い方をすればキリスト者の倫理の確かな案内・導きであり、拠り所だと理解しているのです。

2 正しい祈り

さていま私は、一般的な言い方にしたがって、「主の祈り」と言っています。もちろん、それで間違いないのですが、しかしじつは主の祈りという言葉は聖書にはありません。

今日の聖書箇所、マタイ六章九節に、「だから、こう祈りなさい」という言葉があります。イエスの言葉です。この祈りはイエスから出ているのです。主の祈りの「主」とはイエス・キリストです。主の祈りとは、イエスが、私どもが祈るようにと、教えてください、与えてくださった祈りなのです。

しかし主の祈りは、イエスご自身の祈りでもあります。福音書は私どもにイエスの祈りの生活を随所で伝えていきます。それに今日は触れることはいたしません。主の祈りは、イエスご自身が、そうした日々の生活の中で、祈っていたものです。その祈りを私どもにも許してくださった。それをそのまま祈ることが、イエスの弟子たることとするのです。

イエスはこれを、祈りの一例として、模範として、それを参考にして私どもが祈る祈りとして与えてくださったのではありません。私どもはイエスが教えた通りに祈らなければなりません（ボンヘッフアー）。主の祈りはイエスの祈りとして、祈りそのものです。ですからそのまま祈るときに、それは祈りとして神に聞き届けられることになるのです。

今日の私どもの聖書箇所・マタイによる福音書は、イエスが主の祈りを、神に喜ばれる正しい祈りとして教えてくださった、与えてくださった、その脈絡を明らかにしています。

イエスの時代のユダヤ社会で、祈りが、祈りだけでなく、一般に善行と認められていた施しも、断食もそうだったので、宗教の指導者ファリサイ人や律法学者によ

って汚されていたのです。また異邦人（ユダヤ人以外の人たち）によって、甚だしく誤解されていたのです。イエスは主の祈りを正しい祈りとして教えてくださったといつてよいと思います。

祈るときにも、あなたがたは偽善者のようであってはならない。偽善者たちは人に見てもらおうと、会堂や大通りの角（かど）に立って祈りたがる。はつきり言っておく。彼らは既に報いを受けている。だから、あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れたことを見ておられるあなたの父が報いてくださる（五～六節）。

あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくどと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思ひ込んでいます。彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ（七～八節）。

この二つの部分から、私どもは色々のことを感じます。色々のことを言うことができると思います。しかし、聞き逃してならないもつとも重要な言葉は、「父に祈りなさい」（六節）、「父は・・・ご存じなのだ」（八節）、こうした言葉ではないかと、私は思っています。

簡単にいうと、祈りにさいして、彼ら「偽善者」たちは、自分がだれの前で祈っているか、祈るべきか、忘れていくということなのです。彼らの、目にも、心にも、神以外のものが、他人（ひと）がちらちらしているのです。

これでは祈りになりません。祈りは、何かを、神様にアピールすることでもなければ、デモンストレーションというのでしょうか、何かを、他人に示威し、見せるものでもありません。

それは、個人で祈るときでも、集会で代表して祈るときでも、声を出して祈るときでも、黙祷でも、ともかくただ神の前でなされているということ、その思いに満たされることです。じつさいこれは、神の導き、御霊の助けなしには不可能なことかも知れませんが、でも祈りはそれに尽きると思います。

神の前でなされる、そしてその神はすべてご存じなのです。私どもが何かを言葉にする、言葉にならなくて呻く、それでも神の前でなされる、それは祈りなのです。上手な祈り、そんなのはどこにもありません。へたな祈り、そんなのもどこにもない。ただただ神の前でなされる、父なる神の前で、ということ、そのことだけが祈りにおいては問題なのです。そしてその祈りの本質は願いです。懇願です。神の前に、私どもは願い求める子供として立つのです。

3 父よ、我らの―

そのように考えたとき、イエスが「こう祈りなさい」と命じられた主の祈りの最初の言葉が意味をもつてきます。

天にまします我らの父よ（九節）。

「天にまします我らの父よ」。これは、もとの文章では、よく知られているように、語順が、「父よ、我らの、天にまします」となります。真つ先に、父よ！ です。この父はイエスの父です。この方を、我らの父、呼ぶことを私どもは許されています。この方のみ前で、この方に向かつて。それが祈りのすべてです。

ある人が、祈りについて、こんなエピソードからはじめて書いていたことを思い起こします（トウルナイゼン）。子どもの頃、夜、ふと起きてみると、居間から、話声が聞こえる、そっとのぞいて見たけれど、だれもない、いや一人父親がいた、お父さんが声を出している、話をしている、でもだれと、じつはお父さんは祈っていたのだった、そう書いて、祈りという事態は、私でない方がいなければ成り立たない事態であると書き記しています。

最後になりましたが、主の祈りの全体がどうなっているのか、改めて確認しておきたいと思います。

主の祈りは「天にまします我らの父よ」という神への呼びかけの言葉で始まり、「国とちからと栄えとは 限りなくなんじのものなればなり」という神をほめたたえる言葉で締めくくられます。必ず「アーメン」がきます。ただこの最後の頌栄は、今日の箇所、マタイの原形を見ていただければ、そこにはなく、後に、おそらく礼拝のために付加されたものです。

前と後ろ、呼びかけと頌栄に囲まれて、その間に、「くしてください」という六つの祈願があります。この六つの祈願、最初の三つは神に関わる祈願です。「我らの日用の糧を、今日も与えたまえ」からはじまる後半の三つ、それは、私ども人間に関わる祈願です。言葉遣いもはっきり違っていて、前の三つには、必ず、神を表す「あなたの」あるいは「汝の」がついています。残念ながら私どもの主の祈りは省略されています。つまり「あなたのみ名」、「あなたのみ国」そして「あなたのみこころ」がもともとの言い回しです。後半は、すべてに、「我ら」がついています。主の祈りが我らの祈りであることは、先ほども申した通りです。

この主の祈りの一つ一つの祈願を取り上げるとは、今日はまったくできませんけれども、いくつかの文献を読み直し、十戒の説明のときも触れたルターの『小教理問答書』（一五二九年）の、「悪より救い出したまえ」の解説がとくに心に残ったので最後に紹介しておきます。次のように書かれています。「われわれは、この祈りにおいて、ひとまとめにして、天の父がからだと魂、財産と名誉にかかわるすべての類いの悪から、われわれを救い、そしてついにはわれわれの臨終にさいして祝福された終わりを与え、恵みをもって、悲しみの多いこの世から、天へと受け入れてくださることを祈るのです」。

悪より救い出したまえ、これは主の祈りの最後の祈願として私どもの現在から将来に関わる祈願です。悪の力からの完全な勝利を私どもがもし望むとすれば、私どもの全人生が、すなわち、生きる時も、死ぬ時も、主によって守られ、救い出されることを願うのは当然のことです。そこまでの射程を主の祈りはもっているのです。主の祈りは我らの祈りとして、我らの世界をつつむ祈りです（テイーリケ）。それとともに主の祈りは、私どもの人生の全体を、すなわち、生も死も、そのすべてを包む祈りなのです。